

夢よりも老いを自覚させられて

月岡 誠 — 編集者/ライター

『サイエンス・インポッシブル』 ミチオ・カク/NHK出版/2008年



昔から、レオナルド・ダ・ヴィンチが憧れで、目指していたりもした。やっぱり世界は全部つながっているのだから、科学もそこそこはわかんないと、という思い込み。だから、苦手な科学もこういう読物で、ちっとはフォローしなきゃ、となる。SFを読んでワクワクするのは、ちょっと違う。

この本は、SFに登場するスゴ技（フォースとか念力とか）やスゴ設定（パラレル・ワールドとか）について、最先端の研究を紹介しつつ、「できそう」「もしかすれば」「ムリムリ」の3つに分類する。まあはっきり言って、理屈は半分もわかりませんでした。なので、理系で前向きな若い人にしか勧められません、ワタシ的には。根本的に、前提となるマックスウェルの場の方程式とか、時間・空間が縮むとかいう相対性理論、宇宙のはじまりは爆発だとかいうビッグバン理論なんかが、ゼーんぜん腑に落ちてないので無理なんです。

という状況で一番感じたのが、自らの老い。不可視化とかテレポーテーションとかタイムトラベルといった“できたらいいね系”や、「地球外生命とUFO」「反物質と反宇宙」「並行宇宙」あたりの“わかるとすごいね系”なんか、実現するかしないかなんかどーでもいいじゃんと思ってしまう。一方で、何とかしなくちゃに近い「スターシップ」（太陽は何十億年後には燃え尽きるのだから、他の恒星系に移住するための宇宙船）が「できそう」、「永久機関」「予知能力」が「ムリムリ」というのに妙に安心する。若い人に「人間、額に汗して努力すれば大丈夫」と言えるから——じじいですね。

加えて、いちばん心に残ったのが、生命が存在するには、太陽があるだけじゃダメで、木星サイズの惑星やそれなりの大きさの月、強い磁場、ほどほどの自転速度、銀河の中心からほどよい距離——などの条件がクリアされないと、というくんだり。木星がデカイから弾除けになってくれて、地球に小惑星がバシバシ当たらずに済んでるとか読むと、ホルストのジュピターが鳴り響いて、生きてることに感謝の念が……これまたじじい臭い。

ワクワクすんのは若い女性だけ、じゃエロじじいになっちゃうから、Don't think, feel じゃなく、feelもいいけどthinkもね、ぐらいいきたいものです、もう少し。 